

第 15 章 本通りの大日如来と仲間達

何かと本通りと旧本道寺と門前宿坊街は一体を以って月山・湯殿山参詣の行者が集い、往来した地域・空間であった。この中に出現し、人々から信仰を集めた仏たちに焦点を当てて見る。学問的な専門性を追求するものではなく、庶民・民衆目線からの記述である。

標題名	頁
I. 本通りと大日如来	1
II. 本通りと阿弥陀如来	4
III. 本通りと薬師如来	8
IV. 本通りと弥勒菩薩	11

大日如来・阿弥陀如来・薬師如来・弥勒菩薩は、心の基点・道の起点なる旧月光山光明院（旧本道寺開基時）や本通りと月山、湯殿山に直接的に縁起のある仏様である。

ここでは神仏の分社、分霊、勧請、分祀/分祠についての基本を確認しておく。神道では、神霊は無限に分けることができ、分社・分霊しても元の神霊に影響はなく、本社の神霊と同じ働きをするとされる。また、様々な名前を持つ。例えば、天照大御神は^{おおひるめのむち}大日靈貴、^{あまてらすおおひるめのみこと}天照大日靈尊、その他の呼び方がある。また、仏教においても同様であり、例えば、空海こと弘法大師は、大日如来また弥勒菩薩の化身とされ、さらには、その大日如来はある時には、不動明王、阿弥陀如来、釈迦如来、薬師如来、地藏菩薩、観音菩薩などに様々な仏に変身・変化するとされる。神道の分社・分霊の考え方が通底する。別称を持ちながら相互に同相同価の関係を持つということである。考え見ると、当たり前のことである。仏教は一言で「一即多・多即一」といい、あらゆる事象・事物・万物は、因（内部原因）と縁（外部原因）——内外合わせて無数の原因や条件の接触・鎖交・結合によって成立している^{いんねんしょうき}因縁生起（縁起、^{いんねんか}因縁果）の現象である、と説きく。

また、真言宗では空海こと弘法大師を「南無大師遍照金剛」と呼ぶが、どんな意味なのか。

- ・南無とは帰依する、おまかせするという意味
- ・大師遍照金剛とは、弘法大師・空海のこと
- ・大師とは、朝廷から高僧に死後、その高德を讃えて贈られる^{おくりな}諡
- ・遍照金剛とは、空海が唐に留学し、真言密教を極めた時の^{かんじょう}灌頂名
- ・遍照金剛は、大日如来の別名でもある

I. 本通りと大日如来

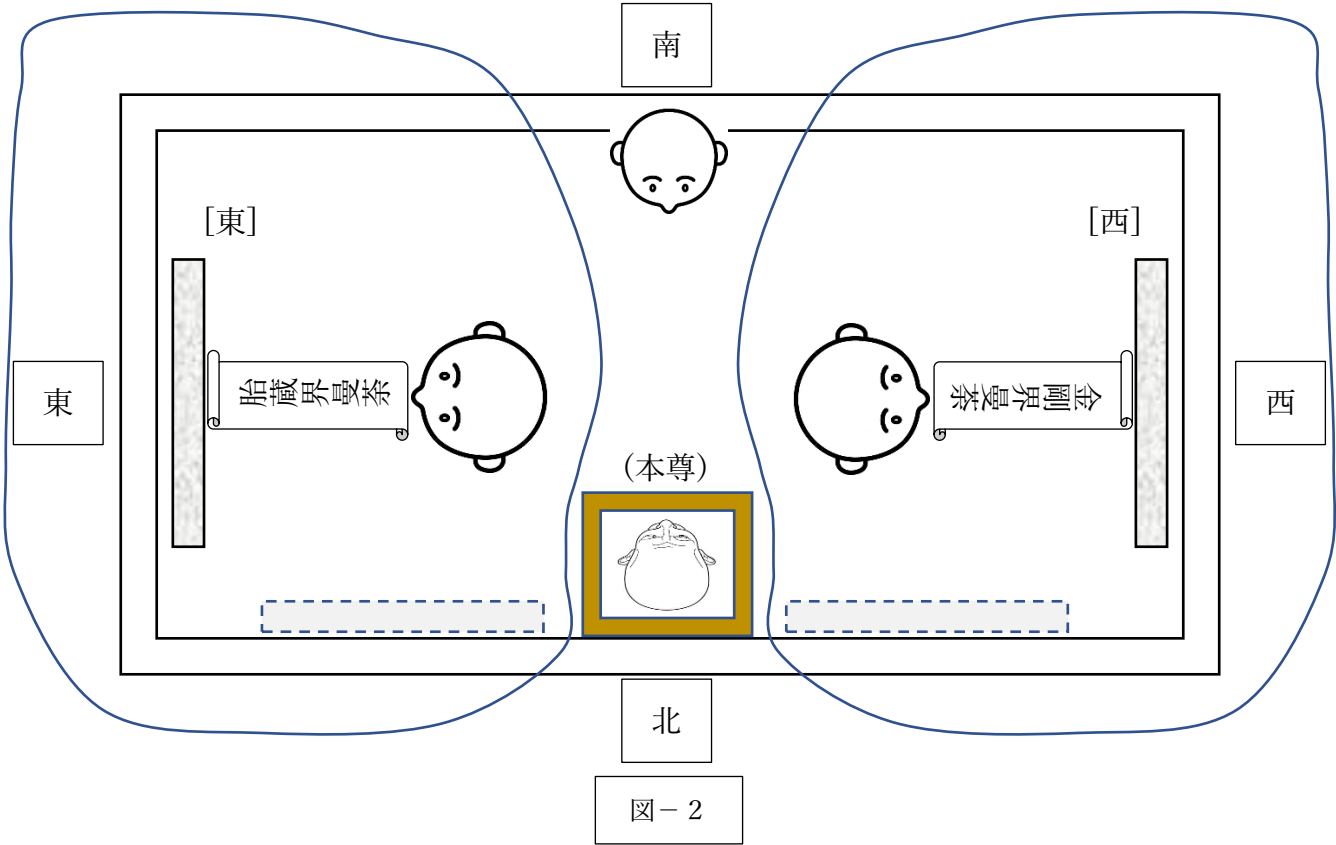
（旧）「月光山本道寺」は、大日如来を本尊として、空海（弘法大師）が開山開基したことを踏まえて参考的に記述する。弘法大師（空海）を宗祖とする真言宗は大日如来を本尊とする「密教」に依拠する。その密教の一面は大日経と金剛頂経を根本經典とし金胎两部曼荼羅で説く。ここでは、その金胎曼荼羅の初歩に係る要点のみを取り上げる。その精神を形に表したものが曼荼羅絵図であり、密教思想・理念を幾何学模様・図式——円と四角——を用いて説いたものである。形態、用途などによって様々な分類があるという。

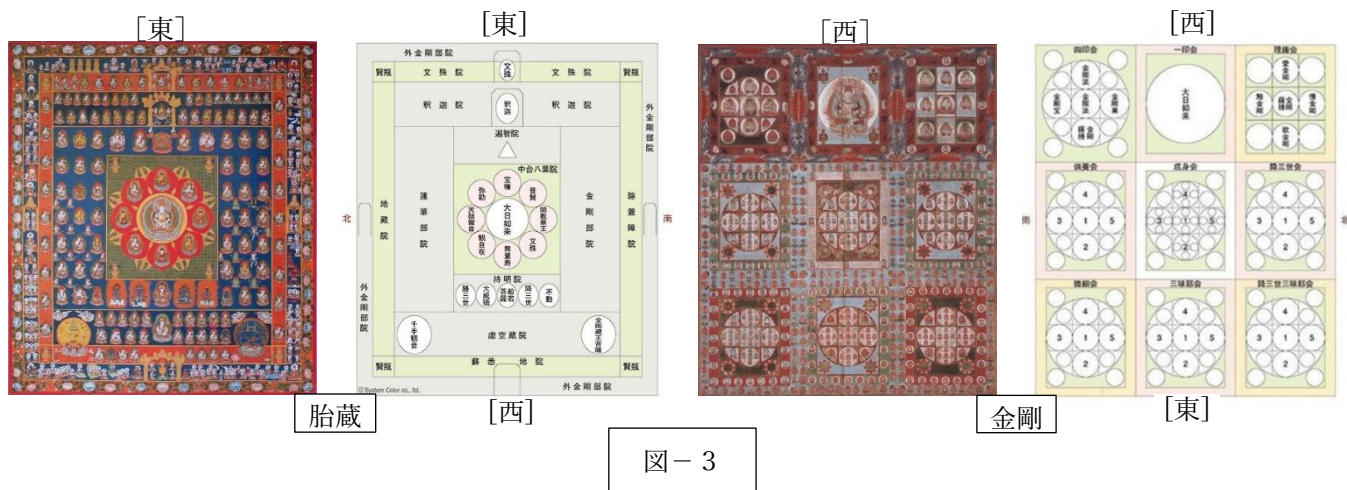
大日如来を曼荼羅で表現する中において対比的に胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅を構想し、その特徴は、AI-Gemini によると図(表)－1 のとおりである。

――	胎蔵界曼荼羅	金剛界曼荼羅
特徴	胎蔵界曼荼羅	金剛界曼荼羅
象徴	理（慈悲、包容、可能性）	智（智慧、実践、確固たる悟り）
中心尊	胎蔵大日如来（与願印など）	金剛界大日如来（智拳印）
配置	中台八葉院を中心とした同心円状の広がり	成身会を中心とした九会構成
教義	衆生の仏性を育む、慈悲の側面	煩悩を打ち破り悟りに至る、智慧の側面
色彩	暖色系、柔らかな色彩	青、金色など硬質で厳かな色彩
雰囲気	穏やか、包容的、受動的	力強い、毅然、能動的
意義	衆生救済の側面を強調	修行による悟りの達成を強調
方位	東	西
経典	大日経	金剛頂経
ジェンダー性	女性	男性

図(表)－1

図－2 の配置関係図は書籍等情報から読み解いて私が図化したもの。
図－3 は小峰彌彦著「曼荼羅の見方」（大法輪閣）より拝借したもの。





図－3

改めて、弘法大師こと空海の深遠な教えに学ぶ。図(表)－4を参照のこと。

- ①；加藤純隆・加藤精一共著「空海 ^{さんこうしいき} 三教指帰・^{ほうやく} 秘蔵宝鑰」より
- ②；次に大角修訳「大日経・金剛頂経」(角川ソフィア文庫)より
- ③；竹村牧男著「唯識・華嚴・空海・西田」より
- ④；小峰彌彦著「曼荼羅の見方」の一節を拝借する。

①～③は類似・共通的な内容であるが、弘法大師の教えは重く深くて、適切な言葉は浮かばないが、全部まとめて一言で言うと、「中道 ^{しょうかん} 正観」思想であろうか。空海は真言密教の宗祖ではあるが、真言密教だけを振り回したのでは無い、一方的な片方向収斂の、偏頗する独善など是一寸もないのだ。知に溺れず自らの実践を通して「行って来い」の往復・円環、縦櫛・横櫛、縦横無尽の「知行合一」精神を折に触れて強調している。これを私は「相違そのまま是認・対等互啓(恵)」と称している。個性とはその人の特徴的な面とか長所の点という狭い意味ではなく、固有・特有の性格である、つまり、こちら側とはまったく違う処を含めて全人格をいう。対等とは生まれ育ちも、社会的地位・身分も、思想信条も関係なく、権利・義務においてまったく同等(同量同質ではなく、力量に応じた応分の全力投球をいう。互啓(恵)はそのような個性・対等を弁えて、そのままの姿をお互いが相手を尊敬することである、結果して恵み合うということである。これが、御大師の教えから学ぶことの一面である。

①	空海は、仏道を志した青年期二十四歳の時「三教指帰」を著し、その後、広大無辺な思想を展開し、晩年五十七歳にして「秘蔵宝鑰」に帰着したと云われている。 享年 62 (満 60 歳没)。 儒教、道教、仏教(小乗、大乘、密教)―――仏教については七宗(声聞乗、縁覚乗、法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗、真言密教)を縦横無尽に学び、思索を深め日本版真言密教を完成させたのだ。
②	密教は浄土信仰や法華信仰、禅宗とも混淆して日本の仏教全体を包み、中世には神仏の全体が「顕密儒道」等と呼ばれるようになった。「顕密」は顕教(浄土信仰や法華信仰)と密教のことで仏教界の総称、 「儒道」は中国の儒教・道教・陰陽道で、それらも密教と混然と混ざり合った。そこに古来の天神地祇も神仏習合して祀られ、多神教・偶像崇拜の最たる状況となったが、その根源には目には見えない大日如来(法身の仏という)があるという点で一神教的な構造を持つ。

③	空海の主著は、・・・さらには <u>中国天台宗や華嚴宗の思想の上に密教を置く</u> もので、各仏教宗派の思想を組織体系化したスケールの大きい比較哲学を展開している。・・・空海の哲学は、インド・中国の <u>仏教思想のすべてを十分に摂取・咀嚼</u> して、日本人として独自に組織し開演したものである。
④	「・・・曼荼羅に描かれる仏・菩薩・明王・天などの多種多様な尊格は、そのすべてが大日如来の意志を体し整然と自分の役目を担った形で表現されています。つまり、曼荼羅上の尊格は個々に主張が異なっていながら、全体としては一糸乱れず調和しているのです。すなわち「個性を明確に表現しながらも、見事に全体の調和がとられている」、のです。集まれば争いを起こすのが人間世界ですが、曼荼羅にはそれがありません。・・・一つ一つの尊像は、単独で勝手な働きをするのではなく、相互に連携し関係し調和しているのです。まさに「個性を尊重し融和が保たれている」、それが曼荼羅世界なのです。・・・」
図(表)－４	

II. 本通りと阿弥陀如来

そもそも、後記図(表)－６に来笹井したとおりで、月山大権現の本地仏は阿弥陀如来であった。

○１；阿弥陀如来は、古来、身近な仏の一つとして信仰されて来た、死後救済の仏である。人間の死後を迎えてくれる極楽浄土界の教主とされることから、難しいことは考えず称名念仏６字名号「南無阿弥陀仏」を唱えたと極楽に直行出来ると信仰されて来た。

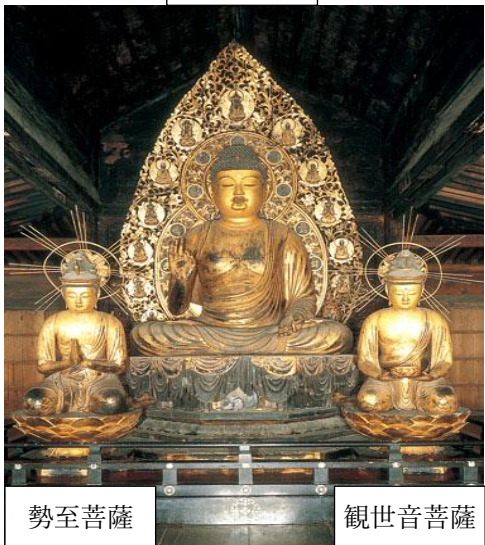
○２；阿弥陀如来（阿弥陀仏）の基本を図(表)－５にて抑えておく。同如来は法華経や浄土三部経を典拠とし、蓮華で彩られた極楽浄土の教主である。

右図は、天台宗京都大原三千院のHPより拝借した国宝の阿弥陀三尊坐像である。

阿弥陀如来は西方極楽浄土の教主、自身を中尊とし、その左脇侍に観世音菩薩を、右脇侍に勢至菩薩を従え、三尊形式を構成して説く。

観世音菩薩は阿弥陀如来の「慈悲」を表す応現力化身とし、勢至菩薩は「智慧」を表す無上力化身と見做している。慈悲は理、智慧は智と置き換え出来る。

金胎曼荼羅の説くと性質と同じではないか。対極にある理と智が相まってこそその有意義であり、どちらかに偏って調和が崩れることの戒めでもあろう。



阿弥陀如来

勢至菩薩

観世音菩薩

図(表)－５

○３；一見、本通り（あるいは大日如来）とは無関係と見るのは当然のこと。しかし、先入観は恐ろしいもの。私は、庶民目線からは阿弥陀如来と大日如来は仏教の共同代表であると見做す。この考え方に資する資料を図(表)－６に記載する。

④は『金岡秀友著「念彼観音力」』より

⑤は『仏教ウェブ入門講座 (<https://true-buddhism.com/>) 』より

⑥は『大角修訳「浄土三部経」(角川ソフィア文庫) 』より

⑦は『立川武蔵著「弥勒の来た道」(NHK ブックス) 』より、一節を拝借したものである。

以上は、まえおきの図(表)ー1～図(表)ー3の考え方を踏まえれば当たり前のことである。

①	真言宗においても念仏を唱える人々がいて、法要の最後に「南無大師遍照金剛」と唱えた後で「南無阿弥陀仏」と唱えます。これを真言念仏といって江戸時代に盛んに行われました。真言宗なのに、なぜ「南無阿弥陀仏」なのかと疑問を持たれることだろうが、真言宗では阿弥陀如来は大日如来（真言宗の本尊）の化身であるとされているからです。
②	特に、一切経七千余巻の中で、 真言宗の『秘密三部経』の『大日経』や『金剛頂経』などでもなく、 浄土宗の『浄土三部経』の『大無量寿経』などでもない、 他の御経にはどう説かれているでしょうか。 ばんじゅ 般舟経（紀元前後に成立した最初期の大乗仏典の一つ）や りょうがきょう 楞伽経（中期大乗仏教経典の一つ）など を取り上げ、「阿弥陀如来と大日如来の関係は、阿弥陀如来が先生であり、大日如来が弟子ということ です。」（と記述してあります。） （また、）「実際、真言宗を開き、弘法大師といわれる空海でさえも、完全な三密加持を行うことはでき ず、最後は『空海の心のうちに咲く花は 弥陀より外に知る人はなし』（諸説あり）と歌っています。 空海以降も、三密加持ができた人は一人もいません。
③	江戸時代には特定の月齢の夜に集まって飲食し、経や真言を唱えたり念仏したりする月待講が広まった が、十五夜の満月の夜に祀るのは阿弥陀仏や大日如来だった。
④	弥勒信仰は、個人や小集団、あるいは支配者層のレベルでは、どの時代にも切れ目なく熱心に支持され ていた。その意味で弥勒は、まるで阿弥陀信仰と背中合わせのような形で、常に日本の仏教シーンの中 に生き続けてきた、根強い力を持つ仏なのである。平安期の貴族の中にも、弥勒の信奉者はいた。藤原 道長は・・・（言うまでもないが、弥勒菩薩と御大師は表裏一体）

AI-Gemini⇒密教の考え方では、大日如来は宇宙の根源であり、あらゆる仏や現象は大日如来の顕現
であるとされいる。よって、阿弥陀如来もまた、大日如来の無量寿・無量光という徳を具現化した存
在として捉えられ、実質的に同一であると解釈されている。この思想は特に覚鑿（平安時代後期の真
言宗の僧）によって体系化された思想である。いわば、密教的な浄土である密厳浄土と、阿弥陀如来
の西方浄土は同一であると説いた。

出羽三山に係る神仏習合時代の本地垂迹説による神と仏・菩薩の関係について、「羽黒山の神仏分離（いでは
文化記念館）」を参考に整理すると以下のとおり。

神仏習合時代（出羽三山大権現）			神仏分離後の現在	
山名(権現)	本地仏	三世	社名	祭神（垂迹）
月山 大権現	阿弥陀如来	祖霊が鎮まる過去の山	がつさん 月山神社	つきよみのみこと 月読命

図(表)ー6

○4；大日と阿弥陀の両者は如来界の共同代表とする見方の強力な・決定的な援護資料を取り上げる。後記図(表)－7は、旧本道寺（真言宗）門前の元宿坊「一明坊」に伝わる（所蔵の）門外不出の「南無阿弥陀佛」掛軸であり、三世十方諸仏の曼陀羅絵図である。これを題材に、お客様に対して当意即妙な語り口を以って説教・唱導・教化薫陶の絵解きを行ったのであろう。とても、珍しい仏佛混淆的なものである。

特徴を列挙すると以下のとおり。

注目すべき最大の特徴は、最下段⑤の位置に「これは弘法大師が自ら著し彫刻したもの」と記述していること。

- ✓ 六字名号「南無阿弥陀佛」は、阿弥陀佛（阿弥陀如来）に帰依するという意味であり、特に浄土宗（法然）・浄土真宗（親鸞）で重んじられる唱え言葉だが、いわば、弘法大師（空海）が阿弥陀仏（阿弥陀如来）に帰依するということを宣言したも同然ではないか。
- ✓ 「南無阿弥陀佛」文字の中に三世十方諸仏——様々な仏様を描いており、軸の一番上左右に「①日」（本尊から見て左）と「②月」（右）を配置している。日月を天空の両眼とし「もの・こと」の調和を説いている。
- ✓ ③は阿弥陀佛、④は左右に大日如来と不動明王を並置し、一番下の⑤には「・・・伝曰 是弘法大師之自著彫刻也然而（これは弘法大師が自ら彫刻されたものだ）」と書いている。
- ✓ 極楽はもちろんだが地獄や大王や上品・中品・下品のことも描いている。

数学記号『の』に同相同価の意味合いを与えて信仰上の繋がりを表せば、「弘法大師（空海）の阿弥陀如来」「真言宗≡浄土宗・浄土真宗」の構図にも見えて来る、あるいは表裏一体と見做される。それぞれの宗派・仏典に主張はあれ、根源は一つ、仏陀（釈尊）の教えに戻ることになる。

これらから、あらためて、先に阿弥陀如来と大日如来は仏教の共同代表と記述したことについて、学問的な厳密解釈はともかくとして、庶民目線からの認識は間違っていないと考える。民衆の心模様からすれば、阿弥陀如来も大日如来も同等・同様にとっても有り難い存在、両方共に大事、崇敬の対象としては甲乙付け難く何ら違和感は無いということであろう。多くの行者を泊め、山に案内し、家にあつては祈祷祭祀を以って接待したであろう宿坊は、きちんと庶民の心を読み取り、その心に寄り添ったという証である、偏っていない。そもそもの仏教の開祖仏陀の原初の教え、弘法大師（空海）の思想やその著作に触れれば、当然のこと。今は数多の宗派・宗教組織があろうが、それは、娑婆の人間が、職業観から金儲けのためにそれぞれの教条的独善で勝手に区切ったに過ぎない。

このような掛け軸を作らせた宿坊も実に大らか・大様^{おおよう}なのだ、偏っていない、チマチマしない。お大師と宿坊共々に真に爽快なる大スケール観である。この掛け軸からは大いに学ぶものがある。

何事も我執で丸めた思い込みでは解けない、既成概念を外せば、新たに見えて来るものがあるものだ。



図(表) - 7

Ⅲ. 本通りと薬師如来

本通りと薬師如来は無関係に見えるがそうでは無い。

○1；原点に立ち返って見る

空海は旧「月光山本道寺」を開山開基するに当って、月光山光明院と命名した。月光は太陰のお月様の光であり、光明は正真の明かりを放つ太陽の光であることは言うまでもない。キーワードは「日と月」、命名に当っては様々な意味合いを託したのだろうが、ここでは一つ取り上げる。

人間の最大関心事である生命・健康保持の願いに信仰を結ぶのは、古来、日光菩薩と月光菩薩を脇侍に従える「薬師如来」一図(表)－8――である。現世利益信仰の代表格である。なお、なぜ、薬師如来なのかの理由は定かではないが、おそらく、次のようなことではなかろうか。生命維持は冷・熱のバランスが必要、身体の外環境は、冬場は冷たく、夏場は熱くなるが、体温は36.5度前後の一定に保持する必要がある。冷を象徴するのは水であり、すなわち月（太陰）に照応する。また、熱を象徴するのはエネルギー（食糧が燃えて発生⇒火）であり、すなわち日（太陽）に照応する、という理由を考えたのではないか。

下は、仏像愛好倶楽部のブログより拝借した国宝の薬師寺金堂薬師三尊像である。

薬師如来は、東方浄瑠璃（瑠璃光）浄土の教主、疾病治癒・健康守護を担う――いわば、生命保障の仏と信仰され、自身を中尊とし、左脇侍に日光菩薩を、右脇侍に月光菩薩を従え、三尊形式を構成して説く。

日光菩薩は、太陽の如く一千もの光明を発することによって諸苦の根源たる無明の闇を滅尽し、月光菩薩は月の様な清涼を以って衆生の生死煩悩の焦熱を鎮静冷却する。

日と月という対極にあるものが同等の立場を以ってこそその有意義であることの教え、どちらかに偏って調和が崩れることの戒めでもあろう。



図(表)－8

○2；湯殿三山「薬師岳」のこと

あれだけの衆目を集めた、熱狂的な信仰を集めた三山総奥の院『湯殿山御宝前』は自然・地殻変動の成せる業であろうが、その地点と一体を成す周囲の山塊を見渡すと図－9のとおり。いつ頃命名したかは知る由もないが、国土地理院地形図に記載するようになったのは例えば近年だとしても呼称はずっと以前からのことだろう。



図－9

仙人岳は、至高の験力を備えて仙術を操ることが出来る人間（仙人）になるべく修行する場所にちなんだものだろう。御沢から湯殿三山の最奥「湯殿山」を目指し源流部を詰めると、山頂北西部断崖の所で左右に分かれて突き上げており、まさに御宝前「女人女關」部類似の形状に繋がる様相だ。ここの薬師岳の命名由来は言うまでもなく「薬師如来」が根拠であろう。御宝前直ぐそばの山に「薬師岳」の命名がある。薬師如来が御宝前を直接守護し、大日如来はその分身を奥の院（山の湯殿山）に籠らせて、この三山全体を抱擁・包摂する構図だろう。

相場俊澄著「出羽三山の秘儀」の一節を拝借すると「・・・湯殿山の後ろにそびえる薬師岳は百二十種の薬草を生み、その根から染み込む水と一緒に、太陽の熱と共に吹き出し、無限力の薬師（奇し）事を起こし（奇跡を起こす）ようになって、大きな信仰を世に広めたのです。湯殿山の赤い神体石は、朝日の様な形から湯殿山大日如来、大日が来る如しと付けられたもので、本当なら太陽薬師根元神と名付けられるものなのです。」

当地からは「空海が開基の湯殿山」に係る「大日如来」→「湯殿山御宝前」→「湯殿三山」→「薬師如来」と連鎖・連関する。

逆に、(旧)本道寺から見ると、空海開基時名称の月光山光明院の本尊は大日如来、月光山光明院の光は正真の光(太陽)を指すことから光明は日光のこと、よって「月光と日光」を併せ持った、つまりは日光菩薩と月光菩薩を従えて、対人間願望応現力を発揮する薬師如来の内包をも企図・意図したものと察知出来る、ここに、旧本道寺⇔湯殿山⇔薬師岳(薬師如来)の繋がりが判明した。

すなわち、大日如来を本尊とする旧本道寺と湯殿山においては、薬師如来信仰(霊気)も基層に流れており、これらは相互に連結していると見做される。

本通りは本道寺から月山へ、そして湯殿山へ、あるいは、本道寺から(横道経由)湯殿山への参詣道であるから、この基本を押さえれば自然なこと。換言(妄想)すれば、旧本道寺の開基时空海の思いは、湯殿山御宝前まで糸(レール)を張って、薬師如来を黒子トレインとして往復させた、と想像している。

IV. 本通りと弥勒菩薩

○1；弥勒菩薩は兜率天という所で、仏（如来）になるために修行している身分の仏（菩薩）である。自ら仏陀の教えを以って修行しながらこの世界に來た人々を教化する特別な存在である。

○2；弥勒菩薩は仏の悟りは52段階であるが、その一段前の51段までに悟った菩薩である。その弥勒が仏の悟りを開くのは、56億7千万年後と言われている。つまり、過去の仏陀（釈尊）は、その死後、56億7千万年後に弥勒となって生れ変るということ。あるいは、仏陀（釈尊）の死から56億7千万年後に人間界に降りて、仏陀の生れ変りとして弥勒菩薩が表れるということ。よって、仏陀の投影仏あるいは未来仏と称される。

なお、浄土真宗の開祖親鸞聖人は、阿弥陀仏の本願に救われた人はこの世では弥勒菩薩と同格になり、死ねば弥勒菩薩より先に仏の悟りを開けるのだと、同菩薩を引き合いに出されて、阿弥陀仏の本願のすごさを教えられている、とのこと。

○3；以上のことから「世直し御仏」とも称された。この世直しということでは、世情が不安と混乱に陥った直後に、民衆の側から降臨を ^{こいねが}希ったという※歴史的事実があるとされています。56億7千万年後に降臨すると云うとてつもない時間で現実にはあり得ない、有り得ないことでは返って反発心から、我こそは呼び込んでその功德神力にすがりたい、応現力に期待するとなる訳で、増々招来を希うこととなります。過去の仏陀には会えない、しかし、未来仏の弥勒には会えるかもしれないという切実な期待感が湧きます。 ※石上善応著「弥勒菩薩」（集英社）より。

○4；「弘法大師（空海）＝弥勒菩薩」である。図(表)－10のとおりであるが、肝は、二つ弥勒菩薩は未来仏であること、お大師は、死後は弥勒菩薩の修行している兜率天に往生して、56億7千万年後に、必ず弥勒菩薩と共にこの娑婆に帰って来る・戻ってくるという誓願（遺言）である。このように身を以って「即身成仏」となるべく入定したことから今も生きて修行しており、端的には弘法大師（空海）は弥勒菩薩であると信仰されている。

弥勒菩薩は、現在仏であるゴータマ・ブッダ（仏陀・釈尊・釈迦牟尼仏）の次にブッダとなることが約束された菩薩（修行者）で、仏陀入滅から「56億7千万年」後にこの世に現われて悟りを開き、多くの人々を救済することが約束された未来仏である。

高野山霊宝館 HP によると、「弘法大師は高野山の奥之院に入定される時、“ われ、閉目ののち ^{とそつてん}は兜率天に往生し、弥勒慈尊（弥勒菩薩）の御前に仕え、五十億余年ののち、必ず慈尊とともに下生せん ”と弟子達に遺言されたと伝えられている。」

（御大師は弥勒の下生降臨の時を待っているのだ。）

図(表)－10

○5；弥勒菩薩の梵字『ユ』と「南無大師遍照金剛」は一体である。 図(表)－11は大沼が四国八十八か寺霊場歩きへんろ（一気通貫スルーハイク）した時に持参・着用した白衣です。背中の首近くには梵字『ユ』とその下に「南無大師遍照金剛」と書かれています。みんなこれを羽織ります。この梵字『ユ』こそが弥勒菩薩を表し、かつ、弘法大師（空海）と同行二人ということの意味している。



図－11

この二点セット仕様はいつ頃から使用されたのか生成 AI-Gemini 等で調べると、次のようなことが分った。

- ・平安時代の仏教書『法華経』の注釈書である『法華玄義』には、弥勒菩薩は白衣を着て、梵字「ユ」を胸に書いている姿で描かれている。
- ・京都の法隆寺には、平安時代初期に制作された弥勒菩薩の白衣が保存されており、この白衣には、「ユ」と「南無大師遍照金剛」の文字が大きく書かれている。この組合せの文字が書かれた最古の例と考えられている。同金堂には、弥勒菩薩の白衣と梵字「ユ」を描いた壁画が残っている。

出羽三山参りにおいて、湯殿山を駆ける場合はほとんどの人達が今でも着用する。

○6；藤原三代秀衡公御前様（奥方）の寄進のこと。本通りに対し、1個所当り6体を「元高清水」まで6個所に計「三十六」体の銅像・金佛を寄進したが、第5章・第21章に記述したとおり、弥勒菩薩への皈依の心を以って奉納したものである。よって本通りには霊威が浸透しているのである。

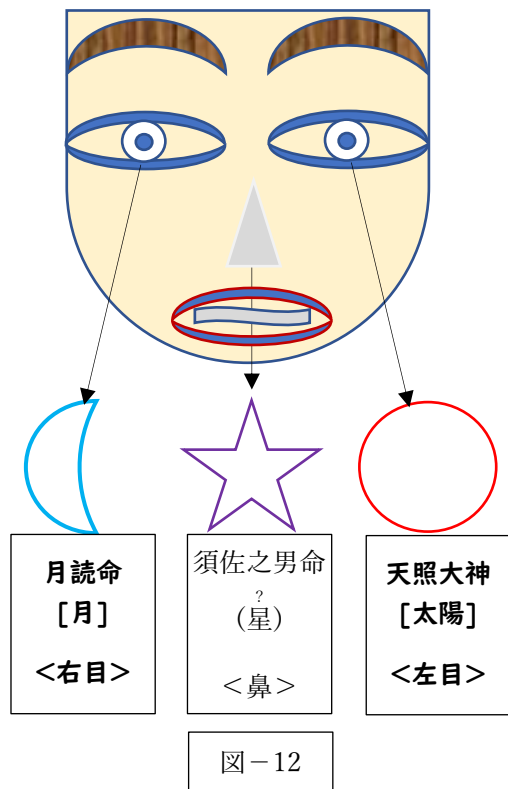
○7；以上の全体像からすれば、旧本道寺から月山経由にしても、旧本道寺から横道経由にしても、最終的に湯殿山を目指して本通り参詣道に分け入った行者は「ユ」と「南無大師遍照金剛」と書かれた白衣（おいづる）を着用したことでしょう。こうなると、自身とお大師と弥勒と三位一体の気分になりましょう。

・・

[参 考]

1. 配置は左上右下の影響

1) 上記の各尊の配置は、吾が国神話における三貴子誕生（図－12）に始まる左上右下の思想の影響が表れている。ここでは結論的なことだけを参考的に記述する。イザナギとイザナミが国生みの後に生んだ神々について、左目（陽）から生まれた天照大御神と、右目（陰）から生まれた月読命に、間の鼻から生まれた須佐之男命を加えた三貴子の登場を華々しく物語っている、その後の歴史上では、天照大御神は仏教の大日如来と習合するなど至る処に登場するものの、月読命は後の展開に殆ど登場しない、しかし、民間信仰・民俗においてはきちんと重要視されて来た。（記紀の中では入り組んでいる処はあるが・・・） 天照大神は昼と大地――（陽）を統(す)べ、月読命は夜と海原――（陰）を統べよと



なった。神様の左右両眼から生まれた日と月は、天体神格化の象徴でもあり、まさしく天空の両眼と見做される。



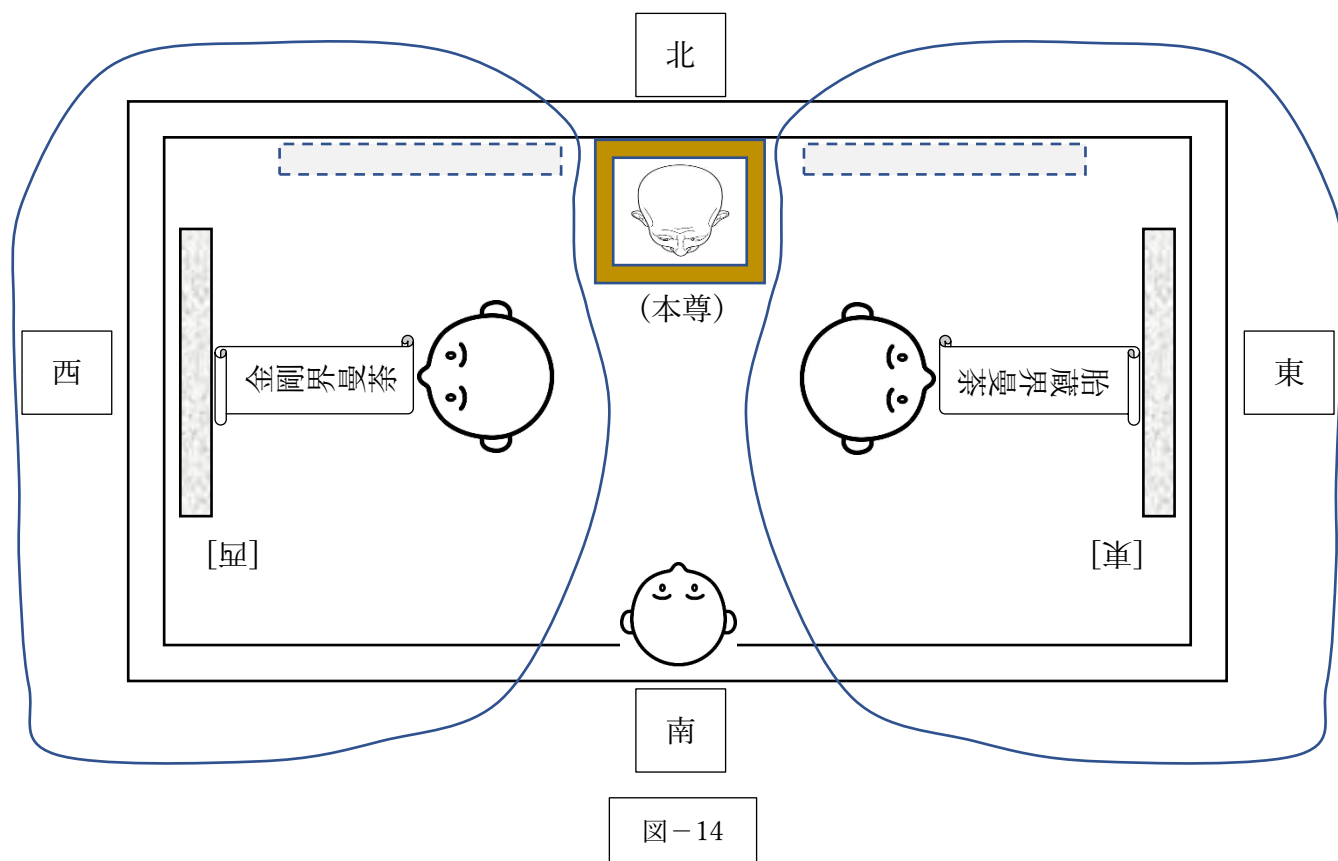
2) 「<https://www.wikiwand.com/ja>」より拝借した図-13のとおりの天皇礼服のこと。孝明天皇（明治天皇の父）の袞衣、あるいは、こんいという。これは天皇の最高祭服で、前側、左右の肩に日月が、背中側首の所

（後ろ衿の下）には北斗七星（星辰）が大きくはっきりと描かれている。天皇即位の儀礼や大嘗祭は天皇の王権を象徴する代表的な儀礼であるが、その場（時）に限って着用されたものである。着用する天皇は北極星の身（立場）で、前面の頭に近い方に宇宙の両眼なる「日（三本足鳥／背景は赤色）」を左肩に、「月（蟾蜍と兎／背景は白色）」を右肩に、後面（背面）で頭に近い方に北斗七星を背負う形となる。なお、この日・月・星辰三体の意味合いは「照臨無私」で、照臨とは、太陽や月が下界を照らす意から、

- ・神仏が人々を見守ること（照覧）
 - ・君主が国土・人民を統治すること（君臨）
- などの意味であるとされる。

3) そのことを踏まえて具体的に見る。

前記図(表)-7・8のとおりに本尊から見て、左に日、右に月を配置している。また、前記図-2について、本尊を上配置すると図-14のとおりのこととなり、本尊から見て左手に胎蔵界が位置することとなり、総ては胎蔵から生まれることからすれば当然の配置である。



2. 真言領域四国八十八か寺のご本尊／図(表) - 15

開創者については、「四国遍路の民衆史(山本和加子著/新人物往来社)」を参考に、本札寺院の本尊について、「四国遍路(真鍋俊照著/ NHK 出版)」を参考に記述しておく。様々な人や仏さまが絡んでいる。開創は 88 所全てが弘法大師と思っていたが、そうでもなかったのか。**薬師如来が一番多い**ことから、病氣平癒に対する信仰の深さが窺われる。

開創者	本堂に祀られている本尊
弘法大師空海は 65 か寺 行基は 18 か寺、役小角(役行者)は 3 か寺、空也は 1 か寺、一遍は 1 か寺	薬師如来は 23 か寺 、千手観世音菩薩は 13 か寺、十一面観世音菩薩は 11 か寺、阿弥陀如来は 9 か寺、大日如来[金剛界]は 6 か寺、釈迦如来は 5 か寺、地藏菩薩は 5 か寺、正観世音菩薩は 4 か寺、虚空蔵菩薩は 3 か寺、不動明王は 3 か寺、大通智勝如来は 1 か寺、五社大明神は 1 か寺、弥勒菩薩は 1 か寺、馬頭観世音菩薩は 1 か寺、文殊菩薩は 1 か寺、毘沙門天は 1 か寺
図(表) - 15	

<end>